その常識、間違っている!?

若年性認知症のホントのはなし

監修 團茂樹（だん しげき）先生

宇部内科小児科医院院長、総合内科専門医、医学博士。1982年日本大学第一内科大学院修了、カナダ州立オンタリオがんセンター留学、那須中央病院内科部長、千代田漢方クリニック院長を経て現職。東洋医学にも詳しい。総合内科専門医として幅広い診療をモットーとする。

取材協力：ティーペック株式会社

65歳未満で発症する認知症が若年性認知症。物忘れや認知機能の低下など、仕事に影響が出るほどの症状が現れても、年齢の若さから発見が遅れるケースが目立ちます。そこで今回は、若年性認知症の症状について総合内科専門医の團茂樹先生にお聞きしました。

＊認知症状には個人差があります。

若年性認知症にまつわる疑問

▲ 物忘れが続くと若年性認知症？

年齢を重ねれば、誰でも記憶機能が低下し、物忘れをするようになります。忘れたことを指摘され、「そうだった、忘れてた！」と気づくのは、健康な範囲の物忘れである可能性が大。一方、認知症の場合は、指摘されてもそもそもの予定や約束を思い出せないことが多いようです。夕食をとったこと自体を忘れてしまう場合は認知症の疑いもありますが、夕食のおかずを思い出せないだけなら、過度に心配する必要はないでしょう。

▲ 若年性認知症は治療できない？

高齢者の認知症と同じく、若年性認知症を根治させる方法は現在のところありません。薬によって病気の進行をある程度遅らせるよう試みたり、副次的に起こる行動・心理症状を和らげる治療をおこなうのが一般的です。ちなみに若年性認知症は、40歳以上64歳以下でも介護保険が適用になる、特定疾病に含まれています。

○ 過度の飲酒は認知症の原因になる？

過度の飲酒により、脳の萎縮が起こることがわかっています。中でも海馬が萎縮すると、記憶の機能が低下します。また、食事をとらずに過度の飲酒を続けると、ビタミンB₁の欠乏でウェルニッケ・コルサコフ症候群を発症。意識障害や平衡感覚を失う症状などを経て、記憶障害へ発展します。記憶障害が現れるとアルコール性認知症とも呼ばれ、完治は難しくなってしまいます。

今の医学で治療や予防は容易でないのが現実

若年性認知症が見つかる年齢は、平均54・4歳。患者数は全国に約3万5700人、有病率は10万人あたり50・9人*です。高齢者の認知症とは逆で、女性より男性のほうが少し多いのが特徴。しかし、有病率が高くないこともあり、初期症状が出てもすぐに認知症を疑う人はあまり多くありません。念のため病院に行っても、更年期障害やうつ病と間違われ、確定診断が遅くなるケースもあります。

若年性認知症のうち、患者数がもっとも多いのはアルツハイマー型。次が脳血管疾患による血管性で、2つ合わせて約7割を占めています。現状、アルツハイマー型の根治薬はありません。海外ではアルツハイマー型の初期段階を対象に、原因と疑われる脳内の悪性のタンパク質を減らす薬が出はじめていますが、非常に高額。日本で一般的に使われる見通しは今のところ立っていません。

予防法も、アルツハイマー型に対しては信頼性の高い方法がないのが現状です。血管性については、原因となる脳血管疾患の治療をすることで、症状の改善が可能です。くも膜下出血の後遺症などによる正常圧水頭症や、甲状腺機能低下症は、認知症と同様の症状が現れるものの、まったく別の病気。治療すれば、認知症状を改善したり、悪化を止めたりすることが可能です。

＊厚生労働省『若年性認知症ハンドブック改訂4版』より

若年性認知症ってどんな病気？

主に2つのタイプがある

アルツハイマー型認知症

脳に悪性のたんぱく質がたまって神経細胞が壊され、脳が萎縮するという説が有力。しかし諸説あり、未解明の部分が多くあります。主な症状は記憶が失われること。初期は加齢による物忘れと思われがちで、次第に慣れた仕事や家事での失敗も増えるなど、異常が顕著に。ごくまれな例では、遺伝による「家族性アルツハイマー病」も。

血管性認知症

脳梗塞や脳出血、くも膜下出血などの脳血管疾患（脳卒中）により、脳神経細胞の一部が死滅して起こります。はじめにろれつが回らない、ふらつく、半身が麻痺するなどの急性期症状が出た後、しばらくして認知症を発症します。このほか、小さな血管の梗塞（隠れ脳梗塞）が増えていき、休には症状が現れないまま認知機能が低下するケースも。

どんな症状があるの？

記憶障害や見当識障害

健康だったころの古い出来事よりも数日前～数時間前の出来事を忘れやすく、指摘されても思い出せません。見当識障害では、まず時間が認識できなくなり、場所や順序、人（相手が誰なのか）へと進行するのが一般的です。

理解力・判断力の低下

料理の手順がわからなくなる、使ったものをしまう場所がわからなくなる、計算が上手くできなくなるといった症状が現れます。情報処理全般の能力が低下し、物事の推測も難しく、ふだんと違う出来事にあうと混乱してしまいます。

実行機能障害

物事の論理的、計画的な実行ができなくなります。毎日同じものを買ってきてしまったり、複数のことを並行して段取りよく進められなくなったり、リモコンなどの操作方法がわからなくなるのも、この障害です。

認識力の低下

特にアルツハイマー型で見られる症状。見えているドアを認識できず部屋を出られない、デュープ入り化粧クリームと歯磨き粉を取り違える、便器の流水で手を洗ってしまうなどがあります。新しいことを覚える記銘力も低下します。

行動・心理症状（BPSD）

行動面では、徘徊、暴言、暴力、介護拒否、入浴拒否、昼夜逆転など。心理面では、不安、戸惑い、自責、悲哀、喪失、物盗られ妄想、睡眠障害など。必ず現れるわけではなく、周囲の人々の否定的な対応などが原因の場合もあります。

若年性認知症は早期発見が重要です

周囲の気づきが大切

患者本人は、約束を忘れても約束したこと自体を覚えておらず、病的な記憶障害を自覚できません。そのため周囲が気づいてあげないと、対処が遅れる結果に。「以前と違うな」と感じることが続いたら、家族が同行して早めに認知症外来などの専門医を受診しましょう。

対処方法はあるの？

アルツハイマー型認知症の場合、飲み薬で一時的に症状の進行を遅らせることができる可能性があります。しかし、2年ほどで効かなくなることが多いようです（個人差があります）。薬以外では、適度な運動で脳を含め体全体の血流を促したり、人と接して脳に刺激を与えたりすることも、悪化を遅らせる作用があるといわれています。行動・心理症状については、抗精神薬、抗うつ薬、睡眠薬、漢方薬などで個々の症状を緩和することが可能です。本人が穏やかな気持ちで過ごせるよう、身近な人々が病気を受容し温かく接することも大切です。